



当院で、鉄欠乏性貧血の患者で、経口での摂取が困難である患者さんには、フェジン®が処方されることが多いですが、最近ではフェインジェクト®という鉄剤がしばしば処方されます。

そこで、注射剤の2剤の鉄剤の特徴や違い、注意すべき点をまとめてみました。

	フェジン®静注	フェインジェクト®静注
		
成分	含糖酸化鉄	カルボキシマルトース 第2鉄
鉄の含有量	40mg	500mg
静注する際の時間	2分以上かける	5分以上かける (35歳以上の場合)
点滴静注する際の 希釈液	ブドウ糖液	生理食塩水
投与間隔	連日投与可能	1週間に1回投与

緩徐に投与することで、一過性の頭痛、全身倦怠感、心悸亢進、悪心等の副作用が軽減されたことから、いずれも緩徐に投与することとされております。

しかしながら、臨床的には緩徐で投与する手間等も考慮し、輸液に希釈して投与されることが多いです。

2剤では希釈する際に用いる輸液が異なり、希釈濃度も異なります。

フェジン®では、ブドウ糖液で5～10倍に希釈し、投与で臨床的安全性が認められております。異なる輸液での希釈、希釈しすぎると、遊離の鉄イオンの割合が高くなり、発熱、悪心嘔吐の副作用のリスクが上昇します。

フェインジェクト®を希釈する際には鉄の濃度が2～4mg/mLの濃度になるように調製します。(1バイアル当たり100mL～250mLの生理食塩水に希釈する)

製剤としての安定性の観点から、2mg/mLより薄くすることは好ましくありません。また、いずれの薬剤も鉄の過剰投与にならないよう総投与鉄量の把握、投与する際には、鉄剤由来の副作用だけではなく、長期の色素沈着の恐れがある為血管外漏出にも注意が必要です。

2022年には、より短期間で鉄の補充が可能な、モノヴァー®という薬剤もでてきており、近年鉄剤も日々進歩してきています。